

琉球大学学術リポジトリ

和歌集

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2021-09-08 キーワード (Ja): 所収コレクション : 琉球大学附属図書館宮良殿内文庫, 宮良殿内 (みやらどうんち) キーワード (En): In Collection: The Miyara-Douchi Collection (University of the Ryukyus Library) 作成者: -, 2009/6/5 16:45 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/6210

和歌集

宮内省

天智天皇

秋乃田た此こりりりの庵いほのはららとありて

持統天皇

春はるのはららと夏なつのはららとと白妙しらたけの

衣き不たしてふあまれかぐ山やま

擁有人磨

あーいいの山やまどり乃のおおれれととりりの
ななぐぐととふふ成なははりりのの神かみまま

山名之寺人

田子に浦よりうらうらひの白くはるの
御座九たま

奥山母りみちりあみとけなく糸の
ちよきくくとたぐ秋はね

中細家持

鶯のよせはけりをく
三ろき成れしは枝り

安陪仲磨

ありのいりやりさげみまかすの

らういれはよいあし一月くも

花撰法師

わう二層はらやこのいろ
ち成こうち山と人

小野小町

花の色はうらりよなられいづ
我身よふふらたがめせ

蟬丸

ちよきやこのはるもく
ちよきとちよきあはさうの

泰識

和国のこと十島をきてて記出ぬと

いふはつぎよあま乃乃御舟

僧正遍昭

と神風雪のかまいぢり吹とがよ

乙女ははぐくまげりそごめを

陽成院

けくむねのまのふりおつる見るは

恋とはりて御りぬる

河原たまた

みち乃く此志のふらぢり誰か

見んはらめり 教あるおくに

光孝天皇

君うためまの胆りいぞくまうつむ

我衣子又言はありけり

中納言新平

立りて決いなをのふのみぢりおつ

まのとききうハ今うけり

立原業平相持

子子振沖代をきりてをうた

かろくれるカ下り 冬之節とは

藤原敏行朝臣

任乃元此きこし小よるるをん家さる

人愛のかさひち人あまぐり世を

伴勢

難波さくみしう記あしのみ此まほ

あつぐこのさ成りてくしをすま

元良親王

まじぬまバ今もあおれト示はなる

身せほくしてもあま愛とぞあ

素性法師

今あむしといひしきり小長月乃

ありぬの月とまらおげうる

文屋康秀

吹うに秋のくさきさる玉はあれハ

ひさしを成あるしやうらん

大江千雲

月見後ちち母物そやれしき

いの身しあらの梅はあしぬ

菅家

六のそとびかぬこきとりあへて手向山
りみぢれゆき神乃まふく
三條右大臣

あつりおどあふさう山のけ孫かつく
人又あふれでくねすもくね

貞信公

少長山ま子のりみぢ紫公あはは
今てびれ神幸まこなん

中納言兼輔

見う乃原ま記てなぐねいけみ川

つらまきとてく恋かろん

源宗平朝臣

こことば各ぞらびーさ返こりあひ

人かたきもかまぬとおひ

九河内新恒

乞あつくふあうまわらんゆねの

を記すぞりせり志くまぐら花

壬生忠岑

有的のほまるとんえーまこれ

あつつきこぶうやまきこあひな

坂上是則

約不^りく^る一^つ年^{とし}を^あり^まの^り月^{つき}を^みた^まま^やと
よ^しに^けく^{こと}に^あれ^る志^{こころ}を^とる

春道列樹

心^{こころ}の^けを^たま^まと^まる^るは
ま^まも^もあ^らぬ^まを^みら^るり^け奉^{ほう}

紀友則

久^{ひさ}し^のり^のや^りの^どを^きこ^まる^るは
志^{こころ}の^ちを^とる

藤原興風

誰^{たれ}か^もし^て私^{わが}人^{ひと}を^むし^り高^{たか}砂^{すな}の

松^{まつ}も^むし^りれ^た友^{とも}を^とる^るは

紀貫之

人^{ひと}を^いや^さぬ^もあ^らぬ^まを^みら^るり^け奉^{ほう}

記^きぞ^むし^りし^て志^{こころ}を^とる^るは

流忍浄巻

夏^{なつ}の^ねを^まま^まと^まる^るは

心^{こころ}の^いつ^つを^とる^るは

文屋朝康

志^{こころ}を^とる^るは

つゝぬきとめぬ玉ど敷るる

者近

志く終身とバおをばちうひて

人の舞はれおくも玉ど敷るる

参議等

あさちぬのをばくしーのいふあのだれと

向まりてゐるどく人乃あひしと

平兼盛

思ふれどさきよ出たりまがさひい

地やみふしと人のさあまじく

壬生忠見

志とてまらりあはまぐさきこえなり

へまじだのくしうおのいしめーう

清原元輔

契されしとみよ袖でまかりほ

己来のまの山たえこはげとん

中細玄毅忠

あひ見ての後れんよくおまバ

むくしとまの紙あははるまかり

中納言朝忠

あふ事乃きそしうきを中ぐよ
人をもみ成もろしけうま

謙徳公

義ともしくばり人をみものして

采のころくになりぬ徳をいふ

曾孫好忠

ゆゑ乃と成りたるあな人がぞとま

やふ来りしぬ徳のまらうれ

惠慶法師

いふを清きけまるあやのまじりきふ

人をみんぬ秋ハ事ふたり

源重定

風成いふみ岩うはまのをけまの

くさけそまのあはれうら

大伴能宣初代

御垣も清士のまじり火れねえ

ひらけまらつ物をまをま

敬原義孝

君のまめれうらざりし命

なごくもがねとあひいなるれ

藤原実方頼長

かきしとふ元やうがきのこころもく
こころを志すところありあひと

敬忠道信物持

ゆめをばくく物と志りたぐ
る成る程めしき物なくあうか

右大納道徳母

秋きほくひとりぬれよのあくるまは
いふことしき物とくか

儀同二司母

日手終一の地末まががさるを

ちふ成るがりの命もうる

大納言公恒

流乃るはきとく久しとるゆれと

かきしとふ終て物とくか

和泉武部

あきとくまこの世乃外志おのいあ

今つさいのりあもるな

崇武部

めぐりあいでみりやうまも日うぬま

そりぐきまよし ねまは月うら

大氣之位

有るの心家のこころの月あは

いそろよみくまはまはる

赤深清

あまのりごほますしあまのさほ

やうくくまの月と

木印 小式部内侍

たのしくのこころのさかぬき

まじこみもさるあまきす

伴持の大輔

あし けるのこやこのいそ

あし九系ふ白いぬらうか

清少納言

あをそめてまのそくまはうらふも

ふふあふのうのうたひ

たふま道雅

今なきとえんあんとびうら

人けとるうらていふし

権中納言定頼

朝あさひくくああららううががけけののりりききんんぐぐは

ああららううのの細こ代しろ本もと

相あ換か

娘むすめももいいひひ不ふささぬぬ神かみささ前まへああるるをを

意いよくよくちちるるんんととももままいいととまま——きき

大おほ僧そう正せい法ぼう寺じ

ののああららううののああららいいれれととままののいいききくく

祀まつりよりよりりりううふふ志し終しま人ひとををああららいい

園ゆ内うち内うち内うち

春はるののああららううののああららいいりりるるををああららいい

かかいいななくくききももんん知ちををおおいいれれ

三さん條じょう院いん

ああららううののああららいいででううららにに世よりり——ううらら

ここいい——ああららううのの月つきううらら

能のう因いん法ぼう師し

ああららううののああららいいののああららいいととままはは

ままああららううののああららいいななりりははまま

西さい遷せん法ぼう師し

ははららううののああららいいととままははららううののああららいいととままはは

いいつつととももああららいいととままははららううののああららいいととままはは

大納言経信

ゆふぎ終八門田のいるををとげまて
河のまのやり秋を病がうく

祐子日記王家記序

書にましくきり一のま酒のあがるま

かきじやゆきぬるまうすま

高砂志おの乃はくく候まなり

高砂志おの乃はくく候まなり

とまのうとみきもあゝるん

源後頼朝伝

ろありあり人成るるをのこ母ろ

まげしりしりいのぬまのせ

藤原基俊

契を記し一をりて病を余り

あまれあししの秋をいぬあり

法性寺入道前関吳政大臣

まごのいしま記あそりれバ久しころ

今あはまがしりかきりしり

崇徳院

瀬をまやま岩ませりし河川の

よれても可なり
源兼昌
あはれとぞ子

淡路島よりちどりのなく
くねねとめぬはるは冥守

た京なま頼猫

秋風よほそむじく
待賢門院堀河

るくうそとくびゆるもくうとの
みざれてけさは物致しそそ

後徳大寺たは
不とそ哉とて啼はり
只王の御舟のそねふ
道因法師

おのいしはれこそも命ハあるま
るまなり
皇太后さま後成

世乃中
山のおくも
藤原清輔朝臣

世乃中
山のおくも
藤原清輔朝臣

世乃中
山のおくも
藤原清輔朝臣

世乃中
山のおくも
藤原清輔朝臣

世乃中
山のおくも
藤原清輔朝臣

るがうへちましく世たりや忠をまきん
うしやうし世がう今あのみき
後惠法師

頼みすげ物おしうらふゆいで
園のいままはまきうらまたり
為行法師

るぞくとそ月やあまのせおのほゆる
かうらうがやわのうらまうら
二床蓮法師

むらさめ此語もすはね枝の葉り

要うらうのぢり秋の知ん言

皇系門院利高

新波江のあそむかり海の一葉か

身をそくしてや意こころい

式子内親王

玉の志よきくるまはこわあがし

忠ぶりのあふらうまぞとふ

殿富門院左様

んせだやまうまの雲の神いそ
清もぞぬまう色はかりしと

後京極権政前右大臣

きりくはくもわが世のこころに

夜ひさしきいとりのかみゆん

二條院源氏

我世を志すひぬ見ぬ沖の石は

人そしるゆかりくまらぬし

強念者大僧

世中、はたすもかえら法よく

あまのこころのばなでうか

春海雅僧

みよれ山の秋をせはるま

うらさささむく夜らるり

前大僧山慈園

おふあわくうき世の民より

歌よみれとみるめら神

入道前大僧大僧

花さうぬありのを乃吾あして

かりゆくまのいつがなをけ李

権中納言定家

あぬ人成まの不忠うしの文を記り

なすやりか乃所もそりく

正三位藤原

同致ぐるのの川のゆらぐ様ハ

みそはらう夏れろく一なりをる

後鳥羽院

人毛ねーいそ氣ろくめーあぢきまく

世そありのゆは物そふ似ハ

順徳院

百敷やあら貴新瑞の志れぶまも

る成あまよりあるむりーるのりる

後鳥羽院

物あまのしきそあやら見さうこうきの

あまあいのまより雲やせくらん

玉津宮大御神

名もありのろそいさうのこころを

まうにまきしものまははれあん

人丸大御神

不のくとあーのうのあまそりに

ーあかきまゆくあねーそそふ

後成

きとてもいんしゝるんさく

かきみのころころのあひら

河法師

ころまけし尾ぶれはうそゝるふ

こまやけぬり沖く舟の

定家

かひの芳も花のうらりふるりそそぬ

小まのせいのこまの

津亦法師

たるとるく家らねりそそて

はらぬ心れむじくらん

兼好法師

おきいゝ本首のりそぬのあそくそ

うめそやしそ神のころ

兼運法師

とくまわすた述へとまのころふ

花となくけりやあまぶらん

僧正通昭

蓬萊此ふらにしぬぬをうき

なりし久家とありしむく

小野小町

色見へどころろ泣ふよの世の中一乃

人はさうら老こそ長けをむけ

直忍業平朝臣

月やあめぬきやむしものころろぬ

家月三つのもとのさうりて

文屋康秀

明くふ秋の葉木のさねるれり

むしふくせせりしとみん

大伴正主

かゝん心ささよりて見ておらん

うしほめる牙も老や一思ふむ

花撰法師

我唐き都のきつととととと

よ成りし心と人いりよる

後京極坊政た政た臣

あそよりい志が笑の花よあま

是の如くはとらん喜地山と

道鏡

こゝのむ七世をーろのゆゑを
と筆をもひつのみちよくする

正二位家隆

あけはすいそへんふのこゝろ

そゆく月のすくのーろ

西行法師

表いふ者家のけむのこゝろ

あそくせさうぬまぶこのく

後た后皇文天皇後成

吾事ゆきこゝのまきい

月ふそけけるありのやぐ

權中納言定家

ての川さ(ハ)かろりる

あそくろ月はいりる

天智天皇

秋の田此かり不乃唐の臣成ありこ

わうなほハ露下ハぬまは

は清和の公ハ秋乃未田成也臣氏乃唐乃臣なりと云むと云む
露下をく申使く申ぶくを記ありと云むと云むに
は只ぬまはくは後と申わハ也平亮利世安氏乃弟に性富也
海を有くせ申ハ天子乃御身にて云臣乃平若乃介所也清藤
ありハ殿と云いハ有れと也

持統天皇

春色て夏ま小々々々白妙の

さくらまをりてふあま乃かり山

は清和の公ハ春此間ハ天の香久山かまきと云く云むありては待も
見ハさりしに母去るぬれハ夏の来り雲の衣也ぬまはては
のぬく小々ありと白妙の衣ありと云は後也

小野小町

まじぬまば身ををるにくこの根せきして

はくふああわいさんとやあひの婦

身のまをりて世りハまはまぬまば身ををるに草の根せきと云む
おとくこもあまあはゆいむとわらふと云む

小町小町白妙

白くすのきしとて種^{たね}のり^りのり^り

ほばとめぬれ世よる世ありきれ

奇のうらふ^{たうらふ}出谷の重乃^{かさね}倍^より^りを^もほ^てこれ^はは^はり^り

世よらありしよらせよあはれ奇なり

漢人^{わんじん}文^{ぶん}意^い

世の中ハ愛ううほのうらとめ

ゆきもしとどありてふちまきバ

奇のうらハあきしうなり

凡^{たふ}河^がに^に往^む恒^こ

世^よに^にと^とう^う山^{やま}よ^よい^い系^{けい}人^{じん}や^や西^{せい}ん^んれ^れ

なをうらとまはいづうゆくらん

奇の世^よに^にと^とう^う山^{やま}よ^よい^い系^{けい}人^{じん}や^や西^{せい}ん^んれ^れ

うらとあはれいづうせりてゆく^と世^よを^をう^うら^ら

人^{ひと}を^をう^うら^らり^り奇^き也^{なり}

業^{わざ}平^{ひら}相^{あい}臣^{しん}

うらをうらへ^へり^り聖^{せい}武^ぶ出^でく^くい^いえ^え

ゆきとあ^あの^の奇^きの^のと^とや^やなり^{なり}

奇のうらら^ら年^{ねん}を^を経^へく^くま^まら^られ^れ一^{いっ}世^せを^をあ^あけ^けい^いふ^ふは^は奇^きに^に

深^{ふか}草^{くさ}の^のよ^よあ^あれ^れゆ^ゆい^いま^まく^く世^よと^とあ^ある^るん^んと^と人^{ひと}や^やあ^ある^るを^を

奇^き地^ち

い

漢人

邦とあはば孰とたれてと引はるん

かりまたたわハ君をて引はるん

予のころハ何れハ君を飽すま出ラを恨ふは
甚だなくて邦とあはば我らとよめて年を経バ
かりとあはれども君の来ぬとのあるさとやうとあ
を扱ふとあはれども君の来ぬとのあるさとやうとあ

後人

山里ハお乃さといーき事こそあま

世のころはすりハすみよりをとり

予のころはあささくはなり

古邦今道

予りよあはれしつてはいとく世の中ハ

流乃さつ流り一風そーきめ流

予のころは知うてハ世の事やつてはいとく世の中ハ
つとよとハ流のさつ流り風のふくそく流るをぞと
よめ流り世

後人

いふころんつとよの中ハ母流るハ

世はつとよとのゆりえこそつとよ

奇のころはらうを成いする和の中に泡とく世のころ
事ハきめりやいふも成りあり奇也

菖原清輔朝臣

たぐくも又このはや玉のそはれを

ろしやとみしよそ今ハ云く一様

奇のわにさきりしそはれ事と今ハ云く一様

りりろはれあすくふきとむりしそはれ事と今ハ云く一様

後人

あはれまきりしそはれく世の花うれ也

後せん人のあはれづきとせぬ

奇のころはらうを成いする和の中に泡とく世のころ

あはれてしゆ人のあはれれせぬとよめる奇也

菖原権者

人あれとあはれふかまきりし

まらういて君があはれん

奇のころはらうを成いする和の中に泡とく世のころ

あはれれとあはれ君が日は見しんよのあはれとせぬ奇也

和泉式部

あはれふ君のあはれはれ

あはれまきりしそはれ

舟のちんばらにさう子の小式於舟ゆりせりし時
上東門院より小式於の邊より衣下を乃出さる
下したまひををせえんげとてくらる舟なり

讀人不知

あふ坂乃花のうせはこゝにせられ

ゆく東より花は流れてぞめり

舟のちんばらあり後のおしし此風はさむされど
ゆく東より花は流れて移るとなり

浮習

花を川よりふれあはぬわが花乃

流るるゆりゆく物よせりりあは

舟のちんばら花を川の淵よりあはれとわが花は流る
かたりゆく定あはれ世のさしなれ人よ恨むは物よ
枕おけるなれとたり

二首内

見よとせは禁むりりり笑うめく

花も奥あふりし心

舟のちんばら花を川の淵よりあはれとわが花は流る
が深山乃奥は山笑たり花のちんばらふりりり心
舟と舟あり舟也

湯殿院

ほくを縁のまのよりあつるみるは川

あぞつさりさみ淵となをぬね

あのをらばそのまおひそめしうらねおひいと

たらしめ水の濁たるうぼりて淵となふり

あへく疎くまふや也

紀貫之

志くを海と川ぬ長いしくむる山

下京のうらむにまはせしうらむり

舟の如ハ船止川ぬ止けりくむらふハ幸たかたうわ葉に

のこしにまはせしうらむとあそらぞりあふやうり

淡人

林風りあ人見たりぬるみぢが葉は

ゆきささぬさぬさぬぞりね

舟のうらハ林風よりささぬさぬさぬのゆくも急

けささぬささぬ我が舟のうらとささぬさぬさぬ也

紀貫之

見舟人もくさ教ぬる奥山乃

あみぢハ板志川もきくさりしり

舟のうらハ川もささぬのたさぬ物なれと板橋

り 是より其の流命と云ふ事後り事也

漢人不知

然りていとくのくれぬらけり事也

民のよみみぢぬ松もんてくれ

事此より女より身ハ兼たり貞心をかくせらば

つ日事あり乃打ハ急くくらさのゆり記也

やこり記也大やうおれやうにさむらとんども

あつハ身よりくたり又さむぐのゆり記也

あそりあそりやうはとくも身をかくる事也

あるは淫事ありけり事と云ふ事なり

くのうまい出くはういれどもそのうらさう 淫事也

うこりてう成貞女なり事也 千葉万本乃

去夏よりとく事也

足どりなるも本松のありに

いつてこ一葉も記の抄松の

糸よりとく事終なり事也

しりともあり事なり事也

事本らとく此が事

事しり人なり事

事しり人なり事

春日列樹

峯のやーッいあよやくーしを花を川
るう流くこまき日日なりを利
今のうらハ花を川の淵乃樹とるるうぶく
月日乃うらかりる事比まやそ紙とあるうなり
淡人志し
世ようれでまよははーお記異作の
うまーうーどぶううどひびぐなく
今のうらハ世にまーうぶう記事のおまを、を
竹うぐりまにまーくもある奇あり

よみ人志し

風あ帯バおまらーし流きつる心
物まよや君あがひりゆー夜
今のうらハおーこの二たうけてかよひ作をう
そとーしそ後のおぶつうなくて相さびーそふ
君ごいとりこゆーれとーしうてすあま奇あり

閑院

しやごしめ梅のハも後うねまへハ
るごねるあれがーりまぬなり
奇のまへハ梅てまわいたーうせー人乃る

びつと香あくるもやむいぬうらぬ
弁此うらぶ探のぬ乃どくねの衣はうもくあきど
うら香さく匂いぬりうらとやあさる奇なり

業平のたぬ

をぬまらばくぬも後の有くこそ

いふくんましく奇本、君うら

弁のうらば弁のをぬれがぬぬわれのありとふは
そにぬもみはえましく奇ままいふくあひーき
君うらとよをぬり奇、もあつ奇也

業平のたぬ

世の中よらぬれ乃あくるぬ

ふせもやいのう人此子のこめ

弁のうら世の中にあきまねのぬれうら
まぐし親をよせもといのう人此子のきあて我
乃と成いし人乃と成くけそよあり

源宗平のたぬ

常盤なる松のみどりも雲くれぬ

今いしーふのなまきりなり

弁のうらば雲のぬれみどりぬれば雲のまき
松乃うらとーふそらうのすほとよをぬれな奇なり

紫性法師

みくのきや人しりくくむくむく

おろとふ折ておほくよと兼

すのうらら人おらうはらとふあふけさげ

花をゆふ折ておほくよと兼

りふと兼たり

淨智

まきすもそんをみとてゆく

記すまにまよとてやるしんふ

すのうららかきみのたむじくをふの兼

あたらしく見ゆそしゆく原は記を里にす

あたらしく見ゆそしゆく原は記を里にす

凡に心祈

我やあまれをそらにまら

教るんのもぞあいにしんふ

すのうららハ記をそらにまら

うやぬて記すしんふかちりそつちあいに

うらんとしんふそらをまら

魚の西廻船

魚の西廻船は東や世の中

射類和歌集

高

後柏原院

高とみまは月りまは光り

秋せたる日の夏去るは

低

道と院

高や志のぐんやこもり

高や此素根にこもり

高

お春海流

高やまは江乃波う海あり

山もくくるる高は

山

横六河を改め

此の所の平は山乃ありて

深れぬる池もつらかりしん
お寧相基池

山陰の岩がづのひのここれあり

おれそのおくもおれりれり

後柏系院

お百を流すつとりのこりしん

海士ハ公のいさよりやハあり

横六河を改め

よりいと流らんわうこりしん

そのありき此月のゆくをせ

道をと流

おれどおの月ハハ流す川乃

ありしにこりてせくこりしん

海 継

おきりるにたのむせありてに

いとりにるにたのむせあり

道をと流

ありけき首の月ハハ流す川乃

さうりさうのつらよ涙をい

親

后柏系尾

あせの秋を身にしむるあびの

まのこむむをいふすしめて

階

為 廣

うーあせ身をーいとまきいそ此遊

竹のよかまはしりあはるま

視

深 継

あせわれぬ人けあふい川への

あせをいふはしりあはるま

穂

后柏系尾

あせしけをるるくられぬと

入秋のあせをふくならを

あ

日

秋にこれあはれむむをるの

あせ目のあせをいふくならを

ほ

海海道を

あせをいふ甲斐はしりあはるま

あせをいふ甲斐はしりあはるま

た

右中め道流

淨妙神白けつめうじんらうりきくらうり興きん比ひ由ゆ又また
齋さい人にん比ひこそあれ

右

沙海宗世

笑わらげくく意いまふまふ神かみ也なり
あはれあといゆる旨あじの白しろ濱はま

勝仁親王

谷たにの水みづ家いえの松まつをを歌うたししても
とらさぶぬいのうち哉

忙

一位

世よ中ちゆうよよ明あきぬぬれれぬぬややぬぬれれそそや

身みにつとむむばばささりりいいははりり

清

後柏系院

かそかいいししふふ屋やのの中ちゆうりりききををああづづくく
のらのらら細こかかららななぐぐれれててううちちくく

滑

雅

親

今いまはは白しろくく世よはは清せいんん百ひゃくととををせせ
かかららいいふふんんししをを死しひひのの成なり

新

内を院

手てににちちややららぬぬものものをを流ながすす世よまま
るるくくのの香かをを比ひけけてて此こゝ少すく閑かん

舊

政

為

貴^キとハ^ニキ^テキ^スキ^ルキ^レキ^ル古^コキ^ク世^セ乃^ノ

長^{ナガ}可^カキ^ク小^コキ^ク白^{シロ}ハ^ニ及^キズ



